かおりの友

All About Japanese Incense

ISSUE 03 AUTUMN 2014

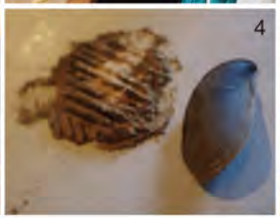
incense project 03

平安貴族のレシピで 練香をつくろう

1 当紙デザイナーさん自家製梅酢と蜂蜜を煮込みます　2 写真奥、丁子や桂皮を使ってインドあんぱんも作る「ス・マートパン」池辺さんと、同じく香りにかかわるお仕事「珈琲ハシドイ」水越さん 3 麝香を試す建築家の坂根さん、強い香りなので使うのはほんの少量 4 貝香の原形と粉末

ん？なにか
惹かれる

自分のにおいで
鼻リセット～



平安貴族に愛された練香とは？

藤野の山中にある古民家で、練香づくりに挑戦しました。しとしと降り続く雨が趣を添えるとともに、湿気が香りを感じ易くしてくれます。鑑真が日本に伝えたともいわれる練香（＝薫物）は、粉末状にした種々の香原料を丸く練り固めたもの。香が貴族に流行した平安時代、衣服や髪、手紙など身の回りの品に香りを移す（＝焚きしめる）のに使われたのがこの練香でした。源氏物語にも多く登場し、「梅が枝」の巻には練香づくりを競う場面も描かれています。当時は魅力的な香りを身につけることが重要な嗜みとされ、貴族たちは独自の調合に拘っていました。今回つくる練香は、代表的な練香のひとつ「梅花」を再現したもの。旧暦で春向けの香りとされ、今度のお正月に焚くのにもぴったりです。

まぜて、練って、自分だけの香りを

原料は五種類。まず一番量の多い沈香を紙の上に四等分に。そこに丁子を乗せ、箆で切るようにまぜていきます。まぜる順番や手順も記録に従って。続いて貝香、甘松、麝香。加えるごとによく混ぜます。今回は、半分はレシピ通りの梅花。もう半分は梅花をオリジナルにアレンジ。約十五種類から好きな香りを加えます。清涼感のある龍脳や、スパイシーな大茴香、マイルドな桂皮、謎を秘めた薫陸あたりを加えた方が多いように見えましたが好みは千差万別。例えば麝香（ムスク）は貴重な動物性香料。西洋人は割と好む一方日本人の多数が苦手という印象ですが、今日は「癖になるかも」という人もちらほら。お酒、煙草、チョコレート、珈琲などの嗜好品に共通するものを感じます。香りをかぎすぎて何が何だかわからなくなったときは、自分の体臭を一度かぐと鼻がリフレッシュされるとか！ 続いて、まぜた原料を練る作業。つなぎは、梅酢・蜂蜜・水を当日煮て使いました。多すぎると水っぽくて丸めづらくなるので、少しずつ加え乳棒で練ります。直径八ミリ程の球状にするのが一般的ですが、今回はおむすび型やキューブなど形でも遊んでみました。

つくりたての練香を空薫してみます

その昔、つくった練香は「瓷器の壺に入れ、地中に埋めて熟成」させていたそうです。今日は折角なのでつくりたての練香を空薫してみました。そもそも製作中終始香りに包まれていますが、焚いた練香は際立ちます。最初は丁子と蜂蜜が混ざったような甘い香りが現れ、次第に沈香や麝香の深い香りが前へ。確かに夏より冬に合いそうな、まったりとした華やかな香りです。寝かせてみると変化があるのでしょうか？今度実際に埋めてみて、改めてレポートをしたいと

◇香りのすすめ◇

「香の上級者の雰囲気」を演出する練香

ご自宅で、香炉を使って練香の空薫をしてみましょう。

■用意するもの

香炉（または蕎麦猪口大の耐火性の器）、灰、炭、火箸（金属製など）、マッチ（またはライター）、練香

■手順

1　香炉に灰を入れます。炭の一部に火をつけ、灰の上に乗せ、炭の香りがしなくなるまで待ちます。約１５分。

2　火箸を使って周りの灰を炭の上にうっすらとかぶせます。

3　練香を炭から少し離して置きます。炭との間に練香一粒分程度のスペースをあけてみましょう。「煙がたたずに香っている」状態が良い火加減のひとつの目安です、焦がさないよう楽しみながら火加減をお試しください。適温だと１粒で約４５分楽しめます。

様々な場所で使ってみましょう

■玄関　一般的なスティック香とは一味違った、言わば「香の上級者の雰囲気」を演出できるのが練香の大きな魅力です。お客様をお迎えするとき等におすすめします。

■寝室　就寝前のふとした時間に 炭をおこし、練香を焚く―。練香のたおやかな香りだけでなく、ほのかな火を扱うその所作が、昂ぶった心を落ち着けてくれます。

■こんな場所でも　料亭の入り口・クリニックの受付・旅館の待合・和のお稽古事の教室など、練香はいろいろな場所で使用され始めています。

5 デザイナー山口さんの練香は龍脳が効いています
6 木工家の藤崎さんはさすがきれいな造形 7 丸めた練香を箱に入れて完成。東川さんはイラストを添えて、交換するのも楽しい

今回ご協力いただいたのはココ！

gallery studio fujino［神奈川 藤野］

木工家の藤崎均さんとアートディレクターの東川裕子さんが、陣馬山麓の古民家を改装してひらいたギャラリー。木工作品を中心に、陶磁器、ガラスなども紹介し、魅力的なワークショップも。10/11-19「帯留展」開催。

〒252-0181 神奈川県相模原市緑区佐野川 768
TEL 080-5695-2424　営業時間、定休日はお問い合わせ
www.studiofujino.com

Recreating a *Neriko* Recipe from 1000 Years Ago

Neriko is a ball-shaped incense made by blending several kinds of materials into a paste which you can enjoy by warming it indirectly. This type of incense enjoyed tremendous popularity during the Heian era (8-12C) among aristocrats as a means of scenting clothes, hair, letters etc. The recorded recipes have been carefully preserved and in this project we tried reproducing the recipe for 'Baika' which means a flower of Japanese plum tree. Materials such as Jinko (agarwood), musk, clove etc. were blended to create an aroma at first sweet, then deep and warm and particularly suitable for spring (Jan-Mar) in the old calendar.

思います。紙面で香りをお届けできずもどかしいですが、しっとり漂う香りが雨の古民家によく合い心地よい空間を演出してくれました。

original products

03

jika

ceramics for incense

A New Line of Ceramic Containers for Incense

Jika is a line of porcelain works by ceramic artist Yuichi Murakami. His work is characterized by high utility and fine design made with great care. Jika consists of three products: (1)a flower-shaped plate for stick incense, (2)circle-shaped/ (3)flower-motif containers with lids which can be used for various incenses like blended chips, stick incense, or Neriko (see back page "incense project"). Jika is a coined word aimed to mean Jiki (磁 器 porcelain works) + Ka (花 flower) and Ka (香 incense) in Japanese. Murakami claims that with this line of incense goods he could pursue more sensitive forms than ordinary kitchen wares which require frequent washing. Born and raised in Tokyo, Murakami began his ceramics career in Okinawa where he encountered local pottery in the course of a trip around Japan. After further study in Gifu, he founded his own studio there in 2011 and is actively engaged in various exhibitions.

今回のインタビューは「jika」の作り手である陶芸家の村上雄一さん。作品の凛とした美しさ、実用性へのこだわり、作陶の丁寧さに惹かれて製作をお願いすることになりました。ラインナップは3つ。スティック香をたてる穴のついた「香皿フリル」、常温で香る原料を入れてあたりに香りを漂わせたり、灰を入れて練香や香木、スティック香などいろいろな香を焚くのにも使用できる「かおり箱 円／輪花」。それらの製作過程やこだわりについて、岐阜県土岐市にある村上さんの工房にて伺いました。

香雅堂（以下、香●）ご自身初の香りのアイテムをつくってみて、いかがでしたか？村上さん(以下村◆)普段は主に食器をつくっていますが、香りのアイテムではつくれる形が違ってきます。香りで使う場合には、しょっちゅう洗ったり動かしたりすることが少ないので、より外見の美しさを求めることができました。たとえば「かおり箱輪花」は食器よりも全体的に薄く、取手や高台も細めにし、実際の花のイメージに近づけてみました。

香●磁器でも陶器でも何度も試作品をおつくり頂きました。最終的に花をモチーフとした磁器にまとまっていきましたが、どのような過程を経て作品ができあがったのでしょうか。作り手としてのこだわりもお聞かせください。

村◆実用性に特にこだわっています。例えば「かおり箱」は、中に入れた香料の香りが蓋を開けた時に広がりやすいように口を大きく広げ、使用していないときは香りが外に漏れないように、蓋がぴったりしまる構造にしています。実用性を厳密に考えていくと、デザインが少しずつ決まっていくんです。さらに作品のイメージを考えていくと、今回の「お香」という繊細なテーマには「磁器」という素材で「花」というモチーフがぴったりだと感じました。

香●実用性に、村上さんの表現を加えていかれるのですね。

村◆「かおり箱輪花」の胴体の周りの細い線、「しのぎ」と言いますが、フリーハンドで一本一本掘り込んでいます。また、口縁の溝も「しのぎ」とは別にナイフのようなものでひとつひとつカットしていきます。食器では普通こんなに手のかかることしないんですけど、お香で使う道具となるとより美しさを求めてこういった表現をしたくなりますね。より花のイメージに近づきましたし、蓋が立てかけやすいという実用面での利点もありました。「かおり箱円」は蓋を開けた時の姿がより引き締まるように、胴体の縁に金彩を施しました。純度の高い金を使っており、この金彩をするために窯で焼成する回数が一回増えるんです…。

香●工房にも何度もお邪魔し、その丁寧な制作風景も拝見しました。土岐でのくらしはいかがですか？

村◆とても製作環境に恵まれています。昔から交通の要所だし、織部に代表される美濃焼で日本有数の焼き物の里なので、良質の土に加え機材や情報もすぐに手に入ります。

香●同じく陶芸家である奥様のあいさんと二人の小さな息子さんと暮らす工房兼ご自宅は、平屋で風が玄関から奥までふーっと通り、香りの合う家ですね。できたての「かおり箱輪花」を使って練香と香木を焚いてみたんですよね。香り、どうでした？

村◆一片の香でも、時間とともに香りが変化するので、多様な印象をもちました。懐古的とか、冬らしいとか、野性的とか…普段は掃除後や来客時にスティック香を使っています。場の空気が変わっていいですよね。

香●今後の活動は？

村◆定番のシンプルなものは勿論、オブジェのようなものや、飴色や海のような青など色ものも展開したいですし、まだ自分のスタイルを固めずに色々挑戦していきたい。無理難題を待ってます（笑）

Who talks?

村上 雄一　yuichi　murakami

東京に生まれる。高校卒業後、日本各地を歩いて旅するなか沖縄県読谷で出会った陶芸家のもとへ弟子入りし工房で５年勤務。多治見市陶磁器意匠研究所で更に学び、土岐市の陶磁器メーカーに務めたのち、2011 年自身の工房を構える。各地で精力的に個展も。今秋は、10/18「川口暮らふと」や11/1-2土岐市「下石どえらあえ陶器祭り」などに参加。　http://yuichimurakami.com/

「jika」すべて紙箱入り税抜価格　香皿 フリル　￥1,800　W115×H40
かおり箱 輪花　￥6,500　W105×H85　かおり箱 円　￥8,000　W90×H40
中に入れる香料は別売。多種のブレンドから選べます。20g 袋入 各￥1,500 程度。

1: 磁器のもととなる石。もろく手でも崩れる。2: 真空土練機から練られた土がでてきたところ 3: 輪花の本体をろくろで素早くかたちづくっていく　4: 左・輪花で使う土の量中・ろくろで形成した状態　右・完成品　焼くとこんなに縮みます　5 少し乾燥させた後、フリーハンドで表面をけずり、しのぎの模様が浮かび上がる。　6: できたばかりの「jika」を使って、練香と香木の聞香体験をする村上さん。「自分の作品で楽しめるのっていいですね。」

つながり
ご縁を毎号ご紹介

結城 澤屋 さん

二千年の歴史をもつといわれ、製作工程がユネスコ無形文化遺産にも登録された極上の絹織物、結城紬。明治４０年創業の奥順さんは、産地問屋として結城紬の発展に寄与してこられました。２００６年には「つむぎの館」というミュージアム事業を開始。ショールのブランド展開やパリの見本市への参加など、革新的な活動で着物ファンだけでなく、多くの人々を惹きつけています。その奥順さんが９月14日、着物の店「結城 澤屋」をつむぎの館 敷地内弐の蔵にてオープン。問屋の役割を越え、着るお客様に直接、産地のこだわりやストーリーを伝えていきたいという想いを実現された場所です。「あらためて、きものに出会う」をテーマに、オリジナルの結城紬はもちろん、作家各氏とのコラボレーション帯や小物など、トータルコーディネートできるアイテムを揃え、種々イベントも実施。敷地内のカフェや周辺レストランも素敵です。ぜひ結城に足を運んでゆったりと奥深いきものの世界をお楽しみください。

結城 澤屋　yuki sawaya
〒307-0001 茨城県結城市結城 12-2
TEL 0296-33-7047
平日 12:00-17:00
土日祝 10:00-17:00　火曜定休
JR 水戸線 結城駅徒歩約 10 分
www.yukisawaya.com

「特製防虫香」
結城澤屋 × 香雅堂

ほのかな香りを身にまとう

すきっと潔いイメージの５色展開（黄・赤・空・青・藍）の特製防虫香。結城 澤屋さんのみで販売です。中の香りは、白檀・桂皮・龍脳など1500年前より愛されてきた和の香りの100％天然ブレンド。衣装ケースに1、2個入れると、ほのかな香りが衣装に移り、防虫効果も期待できます。

香にまつわる 一品逸品

誰が袖美人図

根津美術館蔵　江戸時代
六曲屏風　一双の内、右隻
縦一四五・五センチ 横三四一・八センチ

衣桁（いこう）や屏風にたくさんの衣裳を掛け並べた様子を描く「誰が袖図（たそがずず）」に美人を組み合わせた一双屏風のうちの右隻。衣桁に七領の小袖がかけられ、そばに香炉や香合、文箱を添える。屋内に桜や松が入り込む非現実的な表現が目を引く。他方の左隻には男物の羽織や袴（かむろ）、刀が見え、その前で遊女が禿（かむろ）に文を渡す素振りを示す。（以上、根津美術館より）

香舗の我々としては、真っ先に画面左下の香炉に目がいってしまいます。黒い胴に金色の火屋（ほや）がついているのが香を焚く為に使う阿古陀（あこだ）香炉。その右の貝殻のようなものが焚く前の香を入れておく香合。その前に金色の火箸も見られます。ここではお香の姿は見えませんが、衣服に焚きしめるのに使われたのは多くの場合、練香でした。伽羅や麝香（じゃこう）をたっぷり調合した極上の香りが漂っていたかもしれません。着物と香の切り離せない関係性を確認し、美しい文化に想いを馳せます。本紙では右隻のみのご紹介ですが、人物が描かれた珍しい左隻もあわせて十一月十三日より根津美術館で展示されます。

NEWS & REPORT

香雅堂、2階イベントスペース改装に伴うお知らせ

2階イベントスペースが、生まれ変わりました。従来の和室の使用に加え、今後はテーブルと椅子で、最大２０名程度までのワークショップが可能となります！この機に、予約方法も従来の「電話予約および当日支払」から、「香雅堂WEB ページでのご予約および事前支払」に変わります。何卒ご理解いただけますよう、宜しくお願い申し上げます。

根津美術館さんオリジナル香「誰が袖」製作中！

根津美術館企画展示「誰が袖図ー描かれたきものー」(11月13日〜) にあわせ、オリジナルスティック香「誰が袖 tagasode」を製作させていただいております。パッケージには同紙中面でも紹介している「誰が袖美人図」を用い、作品内の香炉で焚かれているであろう練香をイメージした香りをつめました。根津美術館ミュージアムショップのみで販売です。紅葉の季節、美しいお庭のある同館へどうぞお運びください。

来年の干支　ひつじのかおり袋

少し気が早いようですが、来年の干支商品のご紹介です。香雅堂オリジナルで製作している毎年恒例の人形型とお守り型のかおり袋。いずれも中に、常温で香る和の香料が入っており、懐中する・置いているだけで、お正月を彩るかおりがふわりと漂います。群れで暮らすひつじは家族安泰の象徴。新年のご挨拶や、年男、年女の方へのプレゼントなどに、ぜひお使いください。10 月下旬〜店頭およびウェブサイトで販売開始予定。既にご予約も承っております。北鎌倉の東慶寺ギャラリー＆ショップさんにて 12 月14 日（日）かおり袋 関連イベント実施予定。詳細は決まり次第ウェブサイトに掲載します。

EVENTS SCHEDULE

香雅堂が主催する今後のイベント情報をお知らせします

1 香道の入口をのぞく - 体験香席 -

室町時代から続く三大芸道の一つ・香道を体験いただけるイベントです。香道や香木の歴史等をわかりやすく説明したのち、季節に合った組香（くみこう）をいたします。香道が全く初めての方が対象です。

とき　10/25(土) 10:10-12:00
　　11/12(水) 19:00-21:00
ところ　麻布十番 香雅堂 2F
参加費　3,000円（税込）資料付
定員　各日 12 名

2 ワークショップ - 聞香炉（もんこうろ）で香木を焚いてみよう -

飛鳥時代より珍重されてきた沈香（じんこう）・白檀などの香木。ご自宅でも簡単な方法で本格的な香木の香りを楽しんでいただけるように、一人ひとつ香炉を使いながら、実際に焚いていただきます。以前体験香席に参加された方にもおすすめ。テーブル席で行います。

とき　12/17(水) 19:00-20:30
ところ　麻布十番 香雅堂 2F
定員　10 名程度
参加費　3,000円（税込）

3 香道体験で名月(9月)／紅葉(11月)を愛でる心を聞く

香道御家流による香道体験と、料亭「錦水」の特別御膳で雅な世界をお楽しみいただけるひととき。香道・香木についての概要説明もございます。一度以上組香の経験がある方におすすめです。
※写真はイメージですが同様の御膳をご用意します。

とき　9/29（月）10:30-14:30
　　11/27（木）10:30-14:30
定員　各回 50 名
ところ　目白 ホテル椿山荘東京
参加費　各回　7,000円（税込）
ご予約　椿山荘 03-3943-1140（9:00-21:00）

4 ワークショップ　- 練香づくり -

本誌 incense project でもご紹介した、平安貴族のレシピをもとに、天然香原料をブレンドした練香をつくり、お持ち帰りいただけるワークショップを結城紬の里で開催。ご自宅で楽しむ方法もお伝えします。

とき　2015/2/22（日）時間未定
ところ　結城澤屋（茨城県結城市）
詳細は決まり次第ウェブサイトおよび次回かおりの友でお知らせします。

お申し込み方法が変わりました！

❶❷ のお申し込み ▶ 香雅堂ウェブサイトへ www.kogado.co.jp からご予約ください。

より詳しい情報や、最新情報についてもウェブサイトにて順次おしらせします。

ABOUT US

和の香りをもっと身近に感じていただけるように、繊細で奥深い日本独自の香りの文化を広く知っていただけるように― そんな想いから、香の伝統に新しい感覚と視点でアプローチする季刊ニュースレター「かおりの友」を発行していきます。

＜次号のご案内＞　伝統的な床飾りである訶梨勒（かりろく）をご紹介。紐や裂にもこだわった香袋仕立の袋物です。関連プロジェクトとインタビューも掲載します。12月中旬発行予定。

We are happy to announce our third edition of "Kaori-no-tomo", Kogado's newsletter introducing Japanese traditional incense culture from a contemporary perspective. It will be published 4 times a year in Japanese with summarized English translations included. If you have any inquiries or requests feel free to contact mail@kogado.co.jp.

麻布 香雅堂は、京都の老舗薫香原料輸入卸元「山田松香木店」の七代目次男が、1983 年に独立し麻布十番に構えた店舗です。

1F

日本三大芸道のひとつである香道や、飛鳥時代より親しまれている和の香りに関する商品を幅広くご紹介しています。
〈取扱い商品〉 香木、香道具、工芸品、線香、香袋等

2F

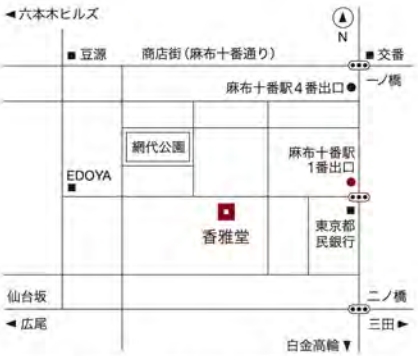
和室では香道・茶道などの定期的なお稽古や、お香を中心として広く「和」にまつわるイベントを実施しています。ご要望に応じて個別開催も承りますのでお気軽にお問い合わせください。

その他最新情報はウェブサイトをご確認ください。
Visit our website for latest information.

香

麻布 香雅堂

KOGADO Co., Ltd.　www.kogado.co.jp
TEL 03-3452-0351　FAX 03-3452-0661
3-3-5 Azabu-juban, Minato-ku, Tokyo 106-0045, Japan
open 10:00-19:00　closed on Sundays & national holidays



東京メトロ南北線・都営地下鉄大江戸線「麻布十番駅」1番出口より徒歩1分
one minute walk from Azabu-juban Station Exit 1 (Namboku or Oedo Line)

かおりの友第3号　発行日／2014年10月1日　発行元・撮影・文／株式会社香雅堂　協力／根津美術館・studio fujino・結城澤屋・村上雄一　「jika」撮影／喜多剛士　デザイン／mumio